北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

令和2年度

Re:北九州の記憶

戯曲集

はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないでしょうか。

令和2年度「Re:北九州の記憶」では、若手劇作家がこれまで行ってきた高齢者の方々へのインタビュー経験を元に、北九州の土地や人々をモチーフにした新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。

目次

朧の日　作　穴迫信一・・・・・1

Q5氏の会議　作　鵜飼秋子・・・・29

めしあがれ　作　坂井　彩・・・・43

自転車泥棒　作　寺田剛史・・・・55

憧憬　作　山口大器・・・・71

還ってきた極道　作　渡辺明男・・・・87

朧の日

作　穴迫信一

【登場人物】

静枝（シズエ）

隆之（タカユキ）　静枝の長男
恵子（ケイコ）　隆之の妻
朝子（アサコ）　２人の娘　12歳
晴　（ハル）　２人の息子　５歳

礼二（レイジ）　静枝の次男
絵美（エミ）　礼二の妻
翔　（ショウ）　２人の息子　10歳

祖母の家。居間。
静枝の夫・隆則の墓参りをした、その日の夜。
長男と次男、それぞれの家族が一同に会し、ご飯を食べた後に、
次の日をどう過ごそうかと話していた時のこと。

弟の家族は新しくできた水族館に行く予定で、長男の家族は帰る予定だったが、
長男の息子の晴だけは、次男の家族と一緒に水族館についていくことになった。
しかし母親の恵子は預けるのは申し訳ないと、それを許さなかった。
恵子は、それなら自分もついていきますと言ったが、
今度は娘の朝子がしくしくと泣き出してしまう。
朝子はどうしても、母親に授業参観とその後のバザーに来てほしかったのだ。
小学校最後のバザーに。

大人達は異様な緊迫感の中、言葉を失っている。
姉の朝子は立ったまましくしく泣いている。
母の恵子は責任を感じて、少しイライラしている。
次男の家族の息子・翔だけが輪から外れてゲームをしている。

静枝　……
絵美　……バザー
恵子　あはは、６年生だから、今年最後で
礼二　そうか、（朝子に）じゃあお母さんには来てもらわんとね、ね、朝ちゃん
朝子　……（泣いているだけで返事しない）
恵子　だったら晴は連れて帰らんと、迷惑かけます
隆之　お前気にしすぎよ、たかが水族館行くだけやろ
恵子　あなたはさあ……（言葉を飲み込む）

礼二　でも本当兄貴の言う通りですよ、水族館だけなら、ねえ
絵美　（頷いて）晴くんお母さんいなくても大丈夫よね
晴　うーん
隆之　晴大丈夫よな、絵美ちゃんが居ってくれるっち言いよんやけ
晴　うーん
恵子　（呟くように）あなたがそうやって言わんでよ
隆之　そうせんとどうするんか、朝がかわいそうやろ
恵子　やけこういう時だけいい人みたいにせんでよ
隆之　どういう意味か
恵子　あんたがちゃんとしとったら朝だってお父さんに来てほしいって言うよ
隆之　お前今そういう話するんか
恵子　朝はお父さんじゃ嫌なんやろ
朝子　嫌だ……
翔　ふっ（と笑う）
隆之　……

気まずい空気。

恵子　晴、今日は帰ろうよ、またお母さんと行こう、水族館は逃げんのやけ
晴　……行かんやん
恵子　なにが？

晴　そんなん言っても結局行かんやん、うちお金ないしお母さん仕事忙しいやん
恵子　そんなことないよ、じゃあ約束しよう水族館、来週行こう
隆之　お前それくらい連れてっちゃれよ
恵子　やけん行くって、じゃああんたが連れてっちゃりよ
隆之　俺が今どれくらい忙しいか知らんのか
恵子　私だって関係ないお金肩代わりしとんやけ
隆之　お前なあ
礼二　あ、いやうち本当大丈夫ですよ全然気にしなくて、晴くんももう大人やしね。
晴　うん
静枝　恵子さん大丈夫よ、私もおるから
恵子　……晴、本当に大丈夫？迷惑かけんのよ
礼二　迷惑も何も
絵美　ないですないです本当に、こっちこそすいません、朝ちゃんの事情も知らずに晴くん誘っちゃったから
隆之　（後ろめたさがあり）晴も男やもんな、礼二、俺の子やけん大丈夫よ
礼二　そうやなあ図太いところも似とったらええけど
隆之　そうやろ（無神経に大きく）がははは、なあ晴
晴　うん
礼二　ばあちゃんもおるし大丈夫やろ、大丈夫ですよ恵子さん

突如、朝子が叫ぶようにして

朝子　ていうかさ、私の授業参観とバザーは前から決まっとったわけやんそれでこいつ（晴）がわがまま言い出してこんなになっとんやん、お前謝れよ本当

晴　……え？

大人たちは一度緊迫して、互いを見たりした後、

礼二　いやいやいやいいいいいい

絵美　アサちゃん大丈夫よ、お母さん授業参観行くって、バザーも

朝子　そんなん当たり前やん前からお母さんと約束しとったんやけそんなんそうやん、なんも知らんくせに口出さんでよ！

恵子　あんたいい加減にし！

朝子　（泣き出して）なんであたしが怒られないけんの

恵子　あんたがそういう言い方するけやろ

朝子　だって礼二さんとか関係ないくせに

恵子　関係ないっちあんた、どういうつもりで言いよんね

恵子の声は、木造の小さな家を揺らす。

礼二　いやごめんごめん、そうよね朝ちゃん俺たち関係ないもんねえ、元から決まっとったんやから、ね

絵美　よしじゃあそうしよう、翔、あんた晴くんのお兄ちゃんなんやけ仲良くするんよ

翔　（ゲームをしながら）ふえーい

恵子　翔くんごめんね、晴をよろしくね

翔　（ゲームをしながら）大丈夫っすよ～

隆之　……じゃあ俺も明日早いけ帰るぞもう、母さんタクシー呼んで

静枝　ああ、はいはい

それぞれが動きだす。

以下の会話の最中、恵子と絵美はなぜか互いに謝って、

静枝は朝子を支えるように頭をゆっくりなでている。

隆之　（晴の背中を触って）よし、いい子にしとけよ

礼二　来るまでもう少しかかるよ兄ちゃん、これだけ飲もうや

隆之　あら、まだ残ってるじゃないの～

礼二　一杯ずつくらいやな

翔　俺もちょっとちょうだい

礼二　バカお前

隆之　ちょっとならええやろ、翔も大きくなったしな

礼二　翔、お小遣いもらっとけ

翔　いやあいい、おじちゃんとこ貧乏なの知っとるけ（3人で笑う）

それぞれは一息つき、ようやく平穏な空気に戻る。

晴　……う～～～あーーーーー、お母さんも一緒じゃなきゃ、いやでああああああああああ、お母さんも一緒に水族館、いきうううううううううう

晴、泣きながら暴れながら、恵子に駆け寄る。
そのときに翔の背中を思い切り蹴る。ゲームが机にぶつかり、電源が落ちる。
翔は怒り、晴を追いかけて背中を蹴ろうとする。
それと同時に朝子は近づいて来た晴を平手で何度も叩く。
大人達はこれもまた同時にそれを大声で制し、しばらく乱闘のようになる。
静枝がその喧嘩の間を割って入る。

静枝　晴くん！晴くん、晴くん！お婆ちゃんおるよ

晴　……お婆ちゃんじゃ嫌だあああああああああああああ

晴、さらに暴れる。
翔と朝子は晴を殴りにかかる。
それぞれの家族が子供達を引き離す。

次男の家族は翔をなだめ、隣の部屋に移動する。

リビングには長男家族と、静枝が残される。

晴は、身体をまるめて動かない。
姉は顔を赤くして息をふーふー吐いている。
恵子は髪をかきあげるようにして頭を抱えている。
隆之は息こそあがっているがまだふてぶてしくしている。
静枝は何かを言い出しそうな口元のまま、言葉が出て来ない。
そのまま15秒ほど、テレビの音だけがある。

恵子　晴、今日は帰ろう
晴　（うつ伏せで顔を体に丸めこませたままのでかなりこもった音で）いやだ
恵子　お母さん来週休み取るけ
晴　（頑なに）いやだ
朝子　お前いいかげんしろちゃ
恵子　朝
朝子　こいつふざけとんちゃ
恵子　朝
隆之　朝お前落ち着けよ
晴　（体を丸めたまま）俺お母さんに聞いたよお墓から帰る時、そしたらいいよって言ったよお母さん、それでさそしたら一回行く気持ちになっとるんやけそれはもう変えられんやん、もうそのつもりになっとんやけ

恵子　それはお母さんもついて行くつもりやったんよ、でも朝のバザーは前から決まっとったんやけ
晴　やったら忘れとるお母さんが悪いやん
恵子　そうよお母さんが悪いんよ、もうそれでいいけん
晴　忘れるくらいなら行かんでいいやんバザーとか

朝子、無言で晴の隣に行き、脇腹を蹴り上げる。

晴　うぐっ！！あああああ
朝子　お前殺すぞ
隆之　朝子、お前やめろ
朝子　だってむかつくもんこいつ、わたし殺したいこいつ
隆之　やけっちお前蹴るな女の子が
朝子　殺したい気持ちに男とか女とか関係ないやん
恵子　あんたも自分勝手なことばっかり言わんの姉ちゃんの気持ちも考えな
晴　お母さんは俺の気持ち考えてないやん
恵子　やけん来週行けばいいやろ
晴　それ先延ばしにしとるだけやん、来週考えるって言いよるのと同じやん。今どうするん今の気持ちは考えてないやん
恵子　じゃあお母さんはどうしたらいいん
隆之　礼二と絵美さんに預けたらいいやんもう

晴　いやだ、もう翔くんいやだ
隆之　はあ？じゃあどうするんか
晴　お婆ちゃんとおる。お婆ちゃんと遊ぶ。
隆之　なんや、それならいいやん。礼二んところは家族水入らずで、晴はばあちゃんに遊んでもらう、それでええやろ母さん
静枝　ああ、私はええよ
恵子　……（声のトーンを少し下げて）絵美さんがね、いや直接言われたわけやないけど
隆之　なんか
恵子　礼二さんとこは東京からこっち来るのも大変やろ、やけん私たちと違ってお婆ちゃんに会える機会も限られとるやろ
隆之　やけなんか
恵子　やけん、お婆ちゃんとね、翔くんの時間をちゃんと作ってあげたいって
静枝　……そうかね
恵子　直接言われたわけやないですけど、お墓参りの帰りに晴がもう歩きたくないって言って泣いたでしょ、そしたらお母さんがおんぶしてくれて、それを翔くんが羨ましそうに見よったんですって、やけん、絵美さんからすればそうゆう気持ちになるの分かるというか、逆の立場やったら私もそう思うやろうし。晴もそうやろ
晴　なってみらな分からん
朝子　帰ろうもう、こいつ捨てていこ

恵子　朝
朝子　私は絵美さんの気持ち分かる
恵子　うん
朝子　私小さい頃全然お母さんとおれんかったもん、お母さんずっと働きよるけん、お父さんの借金のせいで
隆之　え
朝子　それでやっとお母さんとおれる時間増えてきたのに、そしたらこいつが生まれて、生まれて来んでよかったのに
晴　え、生まれて来んでよかったん
恵子　そんなわけないやろ
静枝　朝ちゃん
朝子　こんなやつ生まれて来ん方が良かったに決まっとる
隆之　朝、お父ちゃんだって借金作りたくて作ったんやないんぞ
朝子　じゃあなんで借金あるん
隆之　あれあもう騙されたようなもんよ
朝子　じゃあなんで騙されたん、私らのために騙されんでよ
隆之　そりゃあ騙されたくて騙されたんやないよ
朝子　じゃあなんで
隆之　知り合いが困っとるちいうけ手伝っただけよ
朝子　何を手伝ったん
隆之　やけそのまあ色々よ

朝子　何で言えんの
隆之　説明できんこともあるんよ、まあ、後々悪いことやったって分かって
朝子　なんでその時は分からんかったん？
隆之　助けてやらなそいつ死にそうやったけん
朝子　私もお母さんも死にそうなくらい食べるもんなかったやん、でもお父さん
　　毎日お酒飲んでから帰って来て部屋めちゃくちゃにしたんよ、覚えとる？
　　私の部屋でおしっこしたの
隆之　あ、それあないよ
朝子　したよ、あ～トイレと間違えた～、とか言って
隆之　そんなわけないよ
朝子　じゃあなに？
隆之　何がよ
朝子　私が嘘つく必要ある？
隆之　そりゃあなんか勘違いしとるよ
朝子　してないよ、お母さんその時私泣いた？
恵子　ううん、泣かんかったね
朝子　そうよ、我慢したと、
隆之　そうか
朝子　やけど、これは我慢できんかったと。
恵子　ごめんね朝、さっきお母さん朝のこと怒ってしまって
朝子　（堪えて）いいよ

晴　ねえさあ、
恵子　晴、翔くんも朝も、みんな色々我慢しとるの分かるやろ。お母さんちゃんと約束するけん、今日は一緒に帰ろう
晴　うん、わかった
恵子　よし
静枝　晴くん大人になったね、いつでも遊びおいでね
晴　うん、行く
恵子　はああ、なんかすっごい疲れた、（父を見て）ねえ
隆之　お、おう、そうやな……帰ろうか
晴　生まれて来んでよかったん？
恵子　やけんそんなわけないって言ったやろ
晴　そうなんや
隆之　当たり前やろうが
晴　じゃあ姉ちゃん……謝って
朝子　は？
晴　間違ったこと言ったら謝らないけんのよ、先生言いよったよ
朝子　は？お前なんなん
晴　そうよね？
恵子　ん、そう、よ
朝子　は？
恵子　あんたお姉ちゃんなんやけ謝りなさい

朝子　はあ？また贔屓するやん！
晴　ちがうよお母さんは贔屓しとらんよ、姉ちゃんが間違ったこと言ったけん謝れっち言いよんよ
朝子　別に間違っとらんし私の中ではあんたなんか生まれて来んで良かったもん
晴　じゃあ自分が本当に思ったら相手が間違っとると思っても言っていいん？
朝子　当たり前やろ
晴　そうなんや、ブスが
朝子　……
晴　思っとったら言っていいんやろ
朝子　……

朝子、沈黙の後、台所の方へ去る。
数秒後、台所から食器のガシャンと崩れる音

晴　え
恵子　……包丁
隆之　朝！！

その音は、隣の部屋にいた礼二と絵美にも届き、２人はリビングを覗く。
隆之と恵子、走って台所へ向かう。
礼二と絵美も続く。（朝！朝ちゃん！などそれぞれが呼ぶ）

リビングに残る静枝と晴。

静枝　晴くん
晴　（つんけんと）なん
静枝　お母さん、すき？
晴　うん
静枝　お父さんは？
晴　うーん、うん
静枝　朝ちゃんは？
晴　好きじゃない、嫌い
静枝　何で
晴　意味分からんけ
静枝　何が分からんの
晴　何もしてないのにすぐ切れるし頭がおかしい
静枝　そうかね
晴　それに、向こうも嫌いやと思う
静枝　晴くんのこと？
晴　そう
静枝　そうかね
晴　おばあちゃんはそう思わん？
静枝　うん、朝ちゃんはああ見えてまだ子どもやけね、晴くんが羨ましいんよ、

晴　今は晴くんがお母さん独り占めしとるやろ、やけ寂しいんやと思うよ
静枝　そうなん
晴　お母さんが朝ちゃんばっかりに構いよったら晴くんも寂しいやろ
静枝　うん
　やけね、朝ちゃんはお姉ちゃんやけ我慢しとるんよ、本当は優しい子よね

（遠くから声）

恵子　朝やめなさい！
隆之　朝！危ない！！
恵子　刺すならお父さんにして！！！
絵美　恵子さんダメですよ！！
礼二　でもまあこの中なら！！
絵美　あなたまで！！
恵子　この人ずぶといけんそれくらいじゃあ死なん！！
絵美　恵子さん！！
隆之　とりあえず落ち着けよ朝！
恵子　あんたも覚悟決めり！！
隆之　なんで俺が刺されないけんのか！！
恵子　これまでどんだけ朝に迷惑かけてきたか！
隆之　俺だって大変やったんよ！！

恵子　共働きで家にもおらんで、そのうえお金もなくて、毎日子持ち昆布ばっかり食べさせよって！！
隆之　子持ち昆布うまいやろう！！
恵子　あんたが麻雀ばっかりしよったせいよ！！
礼二　兄貴！ここはもう一回刺されとけ！！
絵美　なんか私もしょうがない気がしてきました！
隆之　絵美ちゃんまで！
恵子　すぐ救急車呼んじゃるけ！！
隆之　じゃ、じゃあ親父はどうなるんか！
礼二　それ言うのは罰当たりやろ！
隆之　親父こそ好きなことだけして生きて死んで、やけど母さん文句ひとつ言わず働きよったやないか！！
礼二　婆ちゃんが文句言わんかったのは俺たちのためよ！
隆之　やったら…
恵子　だからって私が文句言っちゃいけんことにはならんのよ！！
隆之　墓参りしよるのもバカみたいやないか！
礼二　人間そんなもんよ！
恵子　そうよあんたも死んだら手くらい合わせちゃるよ！
隆之　死ぬんか俺！！今から！！
恵子　やけんさきっちょだけよ！ちょっと刺されてそれで終わりよ！

静枝　（聴こえているのかいないのか）……翔くんと仲直りせなね
晴　（聴こえているのかいないのか）……うん

２人は隣の部屋へ。
翔、２人が入って来たことに気付くが無視してゲームをしている。

静枝　晴くん
晴　うん、翔くん
翔　……
晴　翔くん
翔　……
晴　翔くん
翔　なに
晴　さっきはごめんなさい
翔　いいよ、別に、どうでも
晴　ありがと
翔　今ゲーム中なんだけど
静枝　翔くん、おんぶしようかね
翔　は？
静枝　ほら立って
翔　なんで、おんぶ？

静枝　いいけん
翔　いや、今ゲームしようけいい、お父さんたちは？
晴　翔くん
翔　なん
晴　お婆ちゃんがおんぶしたいって
翔　やけなんで
静枝　翔くん、お願いします
翔　もう分かったって、なんなん

翔、仕方なく立ち、静枝におんぶされる。
そこに腹にフォークの刺さった隆之が逃げ込んでくる。

隆之　やばい、朝子に刺される。
静枝　自業自得よ
隆之　婆ちゃんから説得してくれ
静枝　朝ちゃんの言う通りよ、私もあんたには言いたいことがある
隆之　それ後にしてくれ、こっちは命の危険が、
晴　水族館いっしょ行きたいけ死なんでね
隆之　おう、ありがとう、お前だけよ味方は
晴　第一お父ちゃんがどんなに悪いことしとっても、それでいくら姉ちゃんが傷ついとっても、だからって人を傷つけていい理由にはならん、あいつは

それを正義と勘違いしとるんよ
隆之　それ絶対言うなよ、本当に殺されるぞ

隆之、部屋のガラス戸を開けて縁側から外へと逃げていく。

静枝　また逃げた
翔　……お婆ちゃん、もういいよ、疲れるよ
静枝　ああ、そうかね、はいはい

静枝、翔を背中から降ろす。

翔　今してもらっても何も思わんけどね
静枝　え？
翔　おんぶ
晴　でもしてほしかったんやろお婆ちゃんに
翔　今はそういう状況じゃないやん
静枝　ごめんねえお婆ちゃんが気付かんかったけ
翔　別におばあちゃんにはどうも思ってないし
静枝　…そうかね
翔　結局晴が嘘泣きせんかったら良かったんよ
晴　なんが？

翔　あの時、お婆ちゃんにおんぶさせようとして、あれ嘘泣きやろ
晴　違うし、本当に歩けんくらいきつかったんよ
翔　じゃあ誰もおんぶしてくれんかったらどうしとったん
晴　そしたら、そこから動かんかったよ！
翔　そしたら置いて行かれるよ？1人で帰って来れるん？
晴　帰って来れるし
翔　どうやって？
晴　バス乗って
翔　乗り方知らんかったくせに、前から乗ろうとしよったやん
晴　それがなんなん、なんで今それが関係あるん
翔　晴はね、ずるいんよ
晴　はあ？
翔　結局自分のことしか考えてないんよ、お前の父ちゃんと一緒
晴　どこが？それは翔くんやろ？みんなで話しよる時もずっとゲームしてから
翔　なんでお前ん家のゴタゴタに付き合わないけんの？
晴　礼二さんとかが口出ししてきたけ姉ちゃん怒ったんよ
翔　朝ちゃんはああゆう性格なだけやろ、
晴　それもそうやけど余計なこと言ったっち自分でも言いよったやん
翔　父ちゃんはお前のこと思って言ったんよ
晴　翔くんの方がよっぽどずるいやん
翔　なんで？どこが？

晴　礼二さんちゃんと働いとってさあ、ゲーム買ってもらえてさあ
翔　そんなん俺には関係ないやん
晴　でもそういう状況なんやけおんぶくらい僕がしてもらったっていいやん
翔　それとは関係ないやろ、そう思っとることがずるいって言いよるんよ
晴　なんでそれがずるいん
翔　（お婆ちゃんに）ねえ、晴の方がずるいよね
晴　うち貧乏なのにそんなん言われる筋合いない
翔　やけ関係ねえっち言いようやろが！
晴　お婆ちゃんはどっちがすき？
静枝　え？
晴　僕と翔くん
翔　そんな聞かんでも分かるよ、晴よ
静枝　もちろんどっちも好きよ、孫はね同じだけ可愛いよ
翔　いや嘘言わん方がいいよおばあちゃん、おばあちゃんのことも嘘つきって呼ぶことになるよ、本当の気持ち言った方がいいよもうこういう状況なんやけ、子ども相手やけそりゃあそういうしかないのも分かるけど、でも絶対まったく一緒なんてことは有り得んのやけ、実際家も近いし会う機会の多い晴の方に愛着あるやろ？それは別にしょうがないことよ？別におばあちゃんが気にすることじゃないんよ人間そういうもんなんやけ。俺とかほとんどおばあちゃんに会えてないし、どうせそんなに気になってもないやろうし…

翔、最初は強気に語り出したが、次第に声を震わせ泣きそうになる。

晴　あ！うーわ！！嘘泣きや！自分が人に言いよったくせに！

翔　……（泣いてしまう）

晴　…（本当に泣いていることを察し）あ、あ、翔くん…

静枝、その２人の様子を見て、思わず「あっはっは」と高らかに笑い出す。

翔と晴、静枝を不思議そうに見る。

翔　…おばあちゃん

晴　…どうしたん？

静枝　どうしたんって、面白かったんよ、あっはっは

晴　…なんで？

静枝　なんでやろ、やけど笑いが出たんよ、それだけよ

晴　…そうなんや

静枝　おばあちゃんはね、２人とも同じだけ好きよ、同じだけ可愛いっち思う。それは嘘やない。自分の孫として生まれてきてくれたんやけどこまでもおんぶしちゃるよ、ほら（と、背中を向ける）

翔　…へ？

静枝　おばあちゃんまだまだ骨は丈夫やけ、２人いっぺんにおんぶしちゃる。

翔　え
晴　いや、いい
静枝　まだまだあんたたちくらいなら平気よ、来年にはもう出来んかもしれんよ

晴と翔、顔を見合わせるが

翔　いやでも、やっぱいい
晴　うん、やめとく
静枝　…（態勢を戻して、でもにこにこしている）そうかね、なんでやめとくん？
翔　なんか、おばあちゃん潰れそうやったけ
晴　そうそう、なんか想像してしまった
翔　俺やったら絶対抱えきれんもん
晴　うん、抱えきれん
翔　もし抱えきれんかったらお婆ちゃん潰れて救急車で運ばれるよ
静枝　そうやね
晴　それで何ヶ月も入院しとかないけんよ
静枝　そうかもね
翔　それでもいいん？
静枝　それは嫌やね
晴　病院っち怖いしさ、ご飯も美味しくないよ
静枝　そうやね、それは嫌や

そこに恵子、礼二、絵美、朝子が戻ってくる。
恵子は泣いている朝子の手を引っ張っている。

礼二　母さん（と静枝を呼ぶ）
静枝　あら、おかえり
恵子　ほら、朝
朝子　…おばあちゃん、さっきはごめんなさい
静枝　いいんよ気にせんで、おばあちゃんも朝ちゃんの気持ち分かってあげれんでごめんね
恵子　すいません本当
静枝　全然、私は大丈夫
朝子　……

朝子、優しい静枝の言葉にまた泣き出してしまう
大人たちは「あらあら」と和やかに笑う。

晴　（小声で）おんぶやない？
翔　（小声で）俺も思った
晴　（小声で）お婆ちゃん、おんぶや
翔　（小声で）おんぶ！朝ちゃんをおんぶ！

恵子　あんたたち何言いよん？
晴　いや、おばあちゃんが姉ちゃんおんぶしたら泣きやむかなって
恵子　何いいよんね、さすがに抱えきれませんよねえ、もう６年生なんやけ
静枝　…

静枝、ゆっくり背中を向ける

恵子　いやいや
礼二　や、やめとけよもういい年なんやけ
絵美　そうですよ、お義母さん怪我されたら私たち
静枝　礼二、ちょっと支えとってくれる？
礼二　いや、そりゃ支えとくのはいいけど、本当に大丈夫なん
静枝　わからんけど、朝ちゃんに寂しい想いさせたんやけ
絵美　それお義母さんのせいじゃないですから
静枝　何年ぶりやろか、その時はまだ一緒に住んどったけんね、晴くんよりもっと甘えん坊やったんよ
礼二　朝ちゃん俺が支えとくけん、ゆっくり体重移動するんよ
朝子　…うん
恵子　あんた、おんぶしてほしいん？
朝子　…うん
絵美　…じゃあ私、お義母さん側から支えます！

恵子　朝、いきなり乗らんのよ！ゆっくりよ！
朝子　…うん
礼二　母さん本当にダメな時は言ってよ
静枝　分かっとる
絵美　私に体重かけていいですからね
恵子　朝、ゆっくりよ！！

緊張感の中、朝子はゆっくりと静枝の背中に乗る。

静枝　は、は、手離しとる？
礼二　離しとる離しとる
静枝　は、は、よかった、は、
恵子　朝、動かんのよ！
絵美　倒れるときはわたしの上に倒れて
静枝　は、大丈夫、ね、朝ちゃん
朝子　うん
静枝　は、は、はっ！！（とバランスを崩す）
恵子　あああ！
礼二　うおおああ！

全員で２人を支え、介助しながら朝子を静枝の背中から降ろす。

極めて慎重な作業。
終えて、全員「はあはあ」と息があがっている。
静枝はしゃがみ込んでいる

礼二　…母さん、大丈夫…？
静枝　…（晴と翔に）見とった？
翔　……
晴　…うん
静枝　抱えきれんかと思ったけど、一瞬やったけど、ね。
翔　…うん
晴　うん

いつかの、どこかの、家族

おわり。

Q５氏の会議

作　鵜飼秋子

【登場人物】
門司（女性、門司出身）
小倉（男性、小倉出身）
若松（男性、若松出身）
八幡（男性、八幡出身）
戸畑（女性、戸畑出身）

会議室にテーブルが一つ。
テーブルを囲むように５人が席についている。
５人は、重苦しい表情で座っている。

若松　　ええ、前回に引き続き、会議をはじめたいと思います。
４人は、うつむき加減で下を向いて座っている。

若松　今回は、趣向を変えて、各区のみなさんからそれぞれプレゼンをしていただこうと思います。

4人は、顔を少しあげる。

小倉　プレゼン、って何や。
若松　自分のお住まいの居住区の一押しポイントをプレゼンしていただく。
戸畑　前回、殴り合いの喧嘩になってしまったじゃないですか。
門司　そうよ、小倉さんと八幡さん、胸ぐら掴みあっちゃってさ。
若松　だからこその、プレゼンなのです。
門司　今日ここに来るのだって、すっごい気が重かったのよお？
八幡　（咳払いして）申し訳なかった。
若松　ええ、本日私が座長を買って出ていますのは、他でもないこの会議を穏便に進行しなければならない、そのような危機感からです。
戸畑　急に仕切り始めたので驚きました。
門司　八幡さんは座長やめたの？
若松　みなさん、この会議の目的はなんですか？

誰も、言えない。

若松　全国規模の人口減少を見据えた交流人口の増加策及び観光滞在時間の延長による経済波及効果の増加及び全国的な観光地としての認知度向上に係る北九州市の観光振興に係る計画策定に係る会議。

小倉　長すぎなんだよ。

若松　題して観光振興会議。だのになんですか、先週の体たらくは。

門司　ご当地自慢しはじめると、すーぐカッとなるんだから。

若松　この街の行く末を決める大切な会議です。なのに会うたび喧嘩。先週は殴り合い。もう私は傍観者でいられません。私は自ら座長となり、会議を穏便に進めます！

戸畑　穏便って、観光はどうなるんですか。

若松　この際、観光は後回しです。

八幡　え？

若松　みんな仲良く！これをモットーに会議を進めて参ります！

誰も、文句が言えない。

若松　自慢は喧嘩のもと。みなさん、今日のプレゼンでは自慢しないようにお願いいたします。では門司さんから。

門司　えっ！私から？

戸畑　自慢しちゃだめですよ。

門司は少し考える。

門司　門司は、本州西の突端にある下関とは関門海峡を挟み、対岸にある町です。

みな、頷く。

門司　ふぐが全国的にも有名です。他にもお寿司、海鮮丼が食べれるとあって土日の唐戸市場は大勢の観光客で賑わっています。

戸畑　あら？

八幡　下関のプレゼンになっとるんやない？

門司　…あっ！

小倉　なっとるやろ。

門司　門司の自慢をしないって思うと、途端にどういうことか分からなくなって…

若松　下関を門司に置き換えてみてください。

門司　（気を落ち着け、呼吸を整える）はい。

戸畑　（小声で周囲に）門司さんから自慢をとったら何が残るの？

門司　…門司には、関門海峡があります。門司港レトロがあります。門司は北九州ナンバーワンの観光スポットであり…（調子にのって）オンリーワンのデートコースなのです！

若松　ブッブー！

門司　えっ！

若松　今のは自慢です。
門司　どこが自慢なのよ？
八幡　ナンバーワンの観光スポット。
小倉　オンリーワンのデートコース。
戸畑　市内で一番、それは自慢、ということですね。
門司　ええー！そんなこと言ったらプレゼンできないじゃない！
若松　喧嘩を防ぐにはこれしかないんです。
門司　…はい。門司港レトロの目玉は門司港駅です。
戸畑　レトロ建築の代表ですよね。改修されて美しくなりました。
門司　（嬉しくなって）そうなのよお、なんてたって門司港駅は…
八幡　（門司に）まずいよ。
門司　（急にトーンを落として）…重要文化財なんだけどお…。
小倉　なんだけどお？
門司　な、だけに…修復工事に6年という歳月を要してしまい、その間、囲いで覆わなければならず、観光客のみなさまにおかれましては、多大なるご迷惑をおかけすることになりまして…
若松　それは謝罪です。
門司　ああーん、もうっ！無理よ！プレゼンなのに自慢しないなんて…そもそもプレゼンって自慢するためにするんでしょ！
小倉　一理あるなあ。
八幡　やっぱりこのプレゼンはおかしい。

小倉　謙遜するプレゼンにしたら？
若松　ん？
小倉　謙遜なら、自慢とは違うやろ。
みな　ああ！（なるほど）
八幡　謙遜やったら、仲良くやれるかもしれん。
若松　まあ、いいでしょう。それではプレゼンで謙遜をしてください！
門司　私は無理。次の人に回して。
若松　では小倉さんやってみてください。
小倉　ああ？いや…。
若松　どうぞ。
小倉　小倉、といえば！小倉城！以上！
みな　ええー？
戸畑　他にもいろいろあるじゃ無いですか。
小倉　ないんや。小倉には小倉城以外にはなーんにもないんや！
門司　これが謙遜！？
戸畑　そんなことないでしょう？
八幡　小倉競馬！
みな　お？
小倉　いやいや、ありゃあ大したことはないんよ。
みな　…おお。

小倉　あんなもんがあっても、全部収入はＪＲＡに取られるんよ？ありゃあ、大したもんやない。
みな　ふんふん。
小倉　（自慢げに）九州で唯一中央競馬を開催する競馬場やけどね。
みな　んん？
門司　あー！今の自慢よ！
小倉　うるせっ！自慢やない！ええ…ああ…ボートレース若松は大したもんよ。
みな　…おお。
八幡　若松さんあんた、振られとるよ。
若松　な、競艇が…なんか用事ですか。
小倉　北九州市の財政収入を若松の競艇が支えとるらしいやないの。
みな　おおー。
若松　そうなんです！
みな　ん？
若松　…かもしれませんがあ…あんな辺鄙なところにあって何になりますか。車でしか行けませんからね！まあ…せいぜい北九州を食わしてやるくらいしか能が無いんです。ははっ！
小倉　いやいや、金が稼げる施設っていうのは、若松よりも沢山あるけどよお、小倉には…いや、城しかないんや、小倉には…城は！小倉にしかないんや！
八幡　はい、ストップ！自慢だか謙遜だかわからん。

門司　迷走してるわ。
若松　謙遜って難しいんですよ！
八幡　自慢は、ブッブー。
小倉　（八幡に向かって）なんや？きさん、偉そうにすんな！
八幡　駄目なもんは駄目。
若松　落ち付いて、先週の二の舞ですよ、小倉さん。
小倉　（八幡に）自分でしてみろっちゅうんよ。
若松　続けましょう。…若松競艇は…いや、下品。実に、最低。公共施設ががっぽり稼ぐ、ロクな商売じゃありません。死んでしまえばいいんです！
小倉　小倉城は、下品！偽物！ハリボテの天守閣！生きる価値もない！
門司　自己否定は、やめなさい。
戸畑　相手を持ち上げてみたらどうですか？
みな　お？…ああ！（なるほど）
戸畑　謙遜がうまくいくかもしれません。
若松　競艇は…いや、競輪場。小倉のメディアドームはすごいじゃないですか！
小倉　小倉三萩野、アクセス、抜群。立地だけはピカイチですよ。
　　なーんか…勘に障るけど…よし。あんたっ！メディアドームっていうのは、競輪以外には使えんのよ？競輪のない時に、コンサートやら他の競技やらって、無理なんよ？若松競艇の収入をメディアドームが食い荒らしとるんよ！
戸畑　（急に）えっ！そうだったんですか？

小倉　悔しいけど事実なんよ。
戸畑　髪結の亭主。
小倉　悔しいけど事実なんよ。
八幡　謙遜らしくなってきたなあ。
若松　（嬉しそうに）本当ですか？
八幡　ええ、本当です。
若松　（急に）あんた！
みな　お？
若松　（小倉に向かって芝居じみて）もう…金のことは気にせんでええんよ。たとえ、私が廃棄物を受け入れ、涙をのんでも。お金を稼いで北九州が潤うならって、そんな気持ちでおるだけなんよ。
戸畑　なんか…
小倉　（若松の芝居に乗って）いや、俺がこうしていられるのは、若松、お前のおかげなんや。城があって、新幹線が止まるからっていい気になって…。お前に、金の無心ばっかり頼んでしまってなあ。
戸畑　二人が夫婦のように思えてきました。
小倉　（遠い目をして）俺がやったことと言えば、橋をかけるしかできんかった。
若松　橋ってなあに？
小倉　紫川よ。海の橋、火の橋、木の橋、石の橋、水鳥の橋、太陽の橋、鉄の橋、風の橋、音の橋…全部で９つ。メルヘンチックやけど、ただの橋。それに比べて、お前ときたら、若戸大橋。若松の大黒柱や。

若松　あんた、違うんよ。私は、私は…つい最近まで、通行料を１００円いただいて。みんな、橋がないと暮らしていかれんのに…やっとの思いで、無料にはしたけど、それもこれも…ごみ、ごみを、受け入れたおかげで…う、う…（と、泣き崩れる）

八幡　はい、ストップ。辛気臭くなっとる。

門司　とても観光の会議とは思えないわ。

戸畑　でも、仲良し感はでてきた気がします。

若松　（ケロっとして）良いディスカッションができた気がします。

門司　どこがよ！

戸畑　ふたりのあいだに夫婦愛を感じました。

門司　政治がらみの裏事情じゃないのよ。

小倉　おい、選手交代してくれ。なんでか金の話ばっかしちゃうんだよ。

八幡　（呟く）スケールが小せえよなあ…。

小倉　なにをお？

八幡　この金くい虫。若松が泣きよろうが。

小倉　なんや、きさーん！

小倉が八幡の胸ぐらを使む。

みな　わー、きゃー（と口々に言って、ふたりを止める）

八幡　だから最初っから、北九州市なんてやめて八幡市にしとったらよかったんや！

小倉　八幡を主役う？そんなら、もうとっくに錆びついとるわ！
八幡　なんやとー？
戸畑　喧嘩はやめて！
門司　二人をとめて！
若松　私のために争わないでください！

騒動が、落ち着く。

小倉　…次いってくれ。
若松　そうですね、戸畑さん、お願いします。
戸畑　ええー私、ですかあ？
若松　もう、円満に。どうか円満にお願いします。
戸畑　ええー♡八幡さんと、夫婦になってもいいですかあ？
若松　どうぞお好きに。
戸畑　はい…ねえ、あなた♡今週の休日はどこに行く？
八幡　(戸畑のテンションに戸惑いながら)えっ、あ…ど、どこでもいいよ？
戸畑　いやん、き・め・て♡
八幡　そ…そうだねえ。丘の上の美術館にでも行こうか？
戸畑　あら、私の？お・か・の・う・え？
門司　(挙手をして)あの、すみません。私の丘の上って意味がわかりません。
戸畑　戸畑の、丘の上の美術館ですか？ってことです。

門司　私の丘の上って変な連想させるじゃない。
戸畑　それは、勝手な色眼鏡です。やあねえ、嫉妬しちゃって。
門司　嫉妬？これのどこが嫉妬なのよ！
戸畑　仲良し夫婦だからって嫉妬してるじゃないのよ。
門司　どこが夫婦なのよ。あんたはただの腰ぎんちゃくでしょ？
戸畑　腰ぎんちゃくう～？
門司　そうよ！パッとしない、それが戸畑でしょ？
戸畑　な、な！戸畑には、戸畑祇園大山笠があるわ！これに勝る祭りが、あって？
門司　博多祇園大山笠！
みな　おおー。
門司　負けてるじゃないのよ！
戸畑　博多を出すなんて…卑怯者！
八幡　おい戸畑！
戸畑　はっ、はい！
八幡　貴様、もっとシャキッとせんか！博多に負けてつまるか！（戸畑の胸ぐらを掴む）
戸畑　ひい～。
八幡　お前がそんなんやから、いつまでたっても博多に勝てんのや！
戸畑　すっ、すみません。
若松　ストップストップ～！（門司に駆け寄り、小声で）博多は禁句ですよ。

門司　なんでよ？
若松　先週も喧嘩になったじゃないですか？（八幡を指さし）新幹線を黒崎駅にも停めろって。
門司　ああ～！（小倉を指さし）小倉に停まるけ、十分やろがって。
若松　（八幡を指さし）小倉は博多の一歩手前の駅くらいにしか思われてないって。
八幡　なんで、博多に負けないかんのか！八幡は、世界のＹＡＷＡＴＡぞ！八幡製鐵所ぞ！世界遺産やぞ！日本史に名を残しとるんぞ！
戸畑　…はい。（うちひしがれて）
八幡　（戸畑に）お前も製鐵ファミリーのはしくれとして、なんか言わんか。
戸畑　いつも製鐵、なぜか製鐵…。
小倉　おう、八幡さんよお。
八幡　なんだ？
小倉　俺は、息子かの？小倉に製鐵の工場あるんやから。
八幡　…おう。そうやな。
小倉　そしたら若松さんはおじさんかの？石炭積み出しとったんやから、親戚や。
若松　石炭と鉄は切ってもきれない関係です。
小倉　（指さしながら）父さん、母さん、俺、息子。おじさん。
門司　私は？
小倉　あんた、鉄か石炭か、なんかないんね。
門司　あら、石炭の積み出ししてたのよ？海運関係はなんでもござれよ。

小倉　そんなら、あんた親戚のおばさんやろ。な？（八幡に）
八幡　…。
小倉　俺たちは、なんだかんだ家族喧嘩しながらも、繋がっとるんや。のう？
（八幡に）

5人、優しい顔をして目をキラキラさせる。

戸畑　…良かったです。
門司　どうしたのよ。
戸畑　私たち、やっと…北九州ファミリーになれんたんですね！
みな　（うなずく）
戸畑　…博多を敵にまわして。
みな　違うやろ！

わいわい、がやがや。
5人の会議は、まだまだ続く。

おわり。

めしあがれ

作　坂井　彩

【登場人物】
祖母　78歳
孫　18歳

祖母の家。居間。
テーブルにずんだ餅が置かれている。
祖母、お皿を孫の目の前へ。

祖母　　めしあがれ

孫、お皿を押し戻す。

孫　　ばあちゃんが聞いたんよ、最後になにが食べたいって
祖母　　同じたい。小豆も枝豆も変わらんて。
孫　　ぼた餅が、資さんのやつが、食べたいんよ
祖母　　あんた、作った本人にようそんなこと言えるね

孫　私が頼んだのは資さんのぼた餅。ずんだ餅は頼んでない。
祖母　「じんだ」よ
孫　え
祖母　じんだ餅。「ず」やなくて「じ」です。
孫　そんなんどうでもいいし

祖母、お皿を孫の目の前へ。

祖母　めしあがれ

孫、お皿を押し戻す。

孫　最後は地元の味で終わりたいんよ。仙台銘菓はまた今度。
祖母　米沢やから
孫　え
祖母　「じんだ」は米沢発祥よ。それを仙台。さも仙台のもんのように。
孫　やけ、どうでもいいって、
祖母　政宗だってね、
孫　マサムネ、
祖母　伊達政宗
孫　そんな友達みたいに言わんでよ

祖母　もちろん知っとるやろうね
孫　仙台の、
祖母　米沢
孫　え
祖母　米沢だから。政宗は米沢出身。もともとは山形人よ。
孫　もう、どうでもいいんよ、
祖母　政宗が出陣ん時、刀で枝豆を砕いて食べた。その刀が陣太刀（じんだち）と言った。それになぞらえて「じんだ」と呼ばれるようになった。
孫　…
祖母　もともとは「じんだ」やから。「じんだ」もちは仙台のものやない。山形の、米沢のもんです。

祖母、お皿を孫の目の前へ。

祖母　めしあがれ

孫、お皿を押し戻す。

孫　なんで「ずんだ」なん

祖母、お皿を孫の目の前に。

祖母　「じんだ」ね

孫、お皿を押し戻す。

孫　「じんだ」やったら、北九州にもあるやん、「じんだ煮」が。どうして出てくるんが山形の「ずんだ」なんよ。

祖母、お皿を孫の目の前に。

祖母　だから「じんだ」ね

孫、お皿を押し戻す。

孫　あのね、私には、「ずんだ」でも「じんだ」でも、仙台でも米沢でも、どっちだっていいんよ。

祖母　あんた、二度と作ってやらんよ

孫　今まで、作ってくれたことなかったやん

祖母　…

孫　それを思い出の味みたいに

祖母　…

孫　なんで今日なん

祖母　たまたまよ
孫　…
祖母　偶然、枝豆とお餅があったから
孫　…
祖母　悪かったね、ありあわせのもんで

孫、お皿を目の前に持ってくる

孫　いただきます

祖母、お皿を自分の方に戻す

孫　なんね
祖母　ちゃんと味わってよ

孫、お皿を目の前に引き寄せる。

孫　わかっとる

祖母、お皿を目の前に引き寄せる。

祖母　慈しみが感じられん

孫、お皿を目の前に引き寄せる

孫　なんなんそれ

祖母　最上川のせせらぎ、庄内平野のたくましさへの。

孫　わかるわけないやん。行ったことないもん、山形。

祖母　…

孫　ばあちゃんが山形弁話してるのも聞いたことないし、ひいばあちゃんに会ったことだってない

祖母　…

孫　そんな私が、最上川のせせらぎと庄内平野のたくましさを、感じられるわけないでしょ

祖母　そんなことない。細胞が、遺伝子が、覚えとるけん。

孫　なにいいよん

祖母　私の山形での歴史が、あんたの中にも生きとるんよ

孫　帰りたいんやろ

祖母　え

孫　山形、帰りたいんよ

祖母　別にそんなんやないけど

孫　普段、言わんやん、山形のこと

祖母　…

孫　それが急に、「ず」じゃなくて「じ」だとか、仙台でなく米沢だとか、マサムネは私の男だとか、

祖母　そんなはしたないこと、言った覚えはありません

孫　いいや、それくらいの勢いやった。そのつもりで言ってました。

祖母　政宗は、みんなのもんです。私たち山形人、みんなのもんです。

孫　ほら、そういうのよ

祖母　え

孫　私たち山形人って、ばあちゃん、北九州に移り住んで何十年経ったと思いよん

祖母　…

孫　山形で過ごした、何倍もの年数を北九州で過ごしとるんよ

祖母　…

孫　もう立派な北九州人やん

祖母　…

孫　なんで「じんだ」作ったん

祖母　言ったやろ、たまたま、材料が揃ったんよ

孫　わたしが北九州を出ていくから、家を出ていくから、自分の思い出のお菓子作ったんよね

祖母　…

孫　ふるさとの味なんやろ

祖母　…

孫　そうなんよね

祖母　じんだはね、特別な時にしか作らんのって、

孫　知らんかった

祖母　じんだって夏のお菓子なんよ。枝豆が夏の作物やけんね。お盆の時期になったら、遠くから来た親戚とか、久しぶりに帰ってきた子供や孫の来ると振舞うんやって。だから、これは、家族のための特別なお菓子なんて。ひいばあちゃんも作ってくれたんやね。ばあちゃんが山形出るときに。私が北九州を出るのを、自分の時と重ね合わせたんよね。

孫　…

祖母　どんな味なん

孫　…

祖母　母の味は、どんな味やったん

孫　わからん

祖母　覚えとらんの？

孫　…

祖母　食べたら思い出すかもよ

孫、お皿を祖母の目の前へ

孫　めしあがれ

祖母　…
孫　私が作ったんやないけど
祖母　…
孫　ひいばあちゃんに作ってもらったつもりで、食べてみたら
祖母　作ってもらったことないんよ
孫　え
祖母　やけね、どんな味かわからん
孫　…
祖母　これ、実は味見してないんよ。美味しくなかったら、ごめんね。

祖母、お皿を孫の目の前へ。

祖母　お茶、淹れてこようかね

孫、お皿を祖母の目の前へ

孫　めしあがれ
祖母　なに
孫　さあ、どうぞ
祖母　どうしたん
孫　固くならんうちに食べんと

祖母　これは、あんたのために作ったんよ
孫　いいえ、私が作りました
祖母　え
孫　明日、山形を発つあなたのために、母である私が作りました
祖母　…
孫　どうぞ、召し上がれ

祖母、お皿を孫の目の前へ

祖母　食べん
孫　どうして
祖母　山形を出ていくんよ
孫　やけ、しばらく食べれんだろうから、地元のお菓子を、
祖母　嫌いやもん。嫌いやけ、出ていくんやもん。
孫　山形のどこが嫌いなん
祖母　ぜんぶ
孫　なんそれ
祖母　こんな小さい世界で、一生が終わるとか考えられない。私は新しい町へ新しい私に会いに行く。
孫　北九州人になるつもりなんね

祖母　そうよ。やぼったい目元をした顔、もごもごした山形弁、塩辛い食事には、もうさよなら。
孫　帰ってこんの
祖母　うん
孫　北九州で死ぬんね
祖母　そうよ

孫、お皿を祖母の目の前へ

祖母　だから要らんって
孫　きっと食べたくなるよ
祖母　「じんだ」を
孫　いまは食べたくなくても、きっと、食べたくなる
祖母　そんなわけないやん
孫　あんたはね、どこへ行っても、山形人のまんまよ。ずっとね。
祖母　なにいいよん
孫　北九州には馴染みのない顔立ち、たまにぎこちなくなる方言、そして手料理の塩辛いこと。
祖母　…
孫　あんたが山形人として生きてきた記憶は捨てきれん。細胞の奥底に、遺伝子の隅々に、染みついとる。

祖母　…

孫　北九州人になろうとすればするほど、山形人であることを自覚するんよ

祖母　…

孫　私もそうなんやろうか

祖母　え

孫　北九州から出て行っても、新しい自分にはなれんのやろうか

祖母　…

孫　私はこのまま、変われんのやろうか

祖母　新しい私とか、そんなんね、なれるわけないんよ。

孫　え

祖母　わたしは、どこまで行っても、わたし。新しいも古いもない。

孫　…

祖母　北九州で暮らそうが、よその町で暮らそうが、あんたがあんたであることに変わらんの。

祖母、お皿を孫の目の前へ

祖母　めしあがれ

孫、お皿を見つめる。

おしまい

自転車泥棒

作　寺田剛史

【登場人物】

私

不良1

不良2

小倉南区志徳団地駐輪場

女の子（私）が立っている

駐輪場から離れていく男子高校生2人を呼び止める

私　　すみません・・・すみません！

不良達　（立ち止まり）・・・。

薄く小さな鉄板みたいなものが鍵穴に刺さっているのを見て

私　　刺さってます。

不良達　・・・。
私　これ！抜けないんですけど。
不良２　あー抜けない？
私　刺しましたよね。
不良１　ちょもう行こや
私　刺しましたよねって。
不良１　あーね。
私　あーねじゃなくて、刺してます。
不良達　・・・
不良２　ごめん取るわ
私　刺してますよね。
不良２　刺した。
私　抜けないんですけど。
不良１　それ自分の？
私　は？
不良１　よね。
不良２　ごめん取る取る
私　マジありえん
不良２　取ろ
不良１　いやこれ取れんて
不良２　（私に）大丈夫大丈夫

不良1　いや取れんってこれ見てん。
不良2　取れるって。
不良1　取れんって、結構奥まで刺したんやけ。
不良2　（女の子に）大丈夫すぐ取れるけ
不良1　取れんって、見てん奥まで刺さっとるんて、ちゃんと見てん。

不良達は刺さり具合をしっかり確認するために見る

不良2　いや取れるちゃ。
不良1　奥まで入り込んどるやん見てん。
不良2　なんかちゃ見たって。
不良1　奥まで入り込んどったやろ？
不良2　入り込んどったよ。
不良1　入り込んどるんよ絶対取れんって。
不良2　声が大きいて。
不良1　刺したんお前です。
不良2　待てっちゃ、これで開くちゅったん誰かちゃ。
不良1　開くっちゃ。
不良2　誰かちゃ。
不良1　俺っちゃ。
不良2　開かんやねーかちゃ。

不良2　お前が下手なんよ。
不良1　誰がやっても簡単に開く方法教えますっちゅったん誰かちゃ。
不良2　開きます。
不良1　開かんやったやないかちゃ。
私　あの
不良2　いつもなら簡単に開くんよ
私　早くしてください
不良2　えまって、どっか行く？
私　はい。
不良2　乗ってくよね？
私　そのつもりです。
不良1　どこ行くん？
私　ピアノ教室
不良2　習い事？うわごめん、間に合う？
私　ぎり。
不良1　どこまで？
私　モノレールの嵐山口出たマンションのとこ
不良1　全然歩いて行けるやん。
私　20分歩きたくない
不良2　チャリでどのくらいかかるん
私　5分？

不良２　まって最悪これ取れんでも鍵あいて乗れたらいい？
不良１　刺したままってこと？それ鍵がかからんやろ、それこそ盗られるやろ。
不良２　そっかそれ可愛そうやな。
不良１　可愛そうやろ。
不良２　でも取れんし開かんし乗れんやんこれ。どうするん。
不良１　知らんよ。
不良２　知らんやないでなんか考えろや、可愛そうやろが。
不良１　待って最悪こいつの乗る？
不良２　はぁ？
不良１　だって間に合わんのやろ？
私　間に合わん
不良１　持ってこいや。
不良２　俺の？
不良１　お前のよ。
不良２　貸すん？この子に？
不良１　サドル下げたら足とどくやろ。

女の子のサイズ感を確認して

不良１　いーけーる、いけるわ
不良２　マジかよ。

不良1　ピアノ行って帰って来るまでに絶対とっとくけ大丈夫て
不良2　え、ちょっと待ってほんと貸すん？
私　いんですか？
不良1　いいよいいよ、ちょっと持ってこいや。
不良2　じゃあちょっと持ってくるわ。

不良2去る

不良1　ちょっと待ってね。

私は別の自転車に乗ろうとして

不良1　なにしてんの
私　ピアノ間に合わない。
不良1　うん、え、それ誰の？
私　あれ、鍵ついてる
不良1　え？
私　鍵ついてますねこれ

駐輪場から引っ張り出そうとして。

不良1　２台持っとん？
私　これで間に合う
不良1　それさ、盗ろうとしよる？
私　でもいつもここにあるから、ホコリかぶってる。
不良1　ちょっとまって、どっち？これ私の？え？
私　間に合わないから。
不良1　だからこれは自分のなん？
私　だって間に合わないから。
不良1　間に合わないのは分かったから、だから俺たちが自転車貸すって。
私　いやもうこれあるんでこれで。
不良1　それ自分のじゃないよね？
私　もうこれで行けば絶対間に合うから。
不良1　いやいやいや、泥棒やん。
私　だって間に合わないから！
不良1　大きな声ださんでや。
私　ああもう間に合わない！、ああどうしよ、ああもうどうしよう。

引っ張り出そうとして。

不良1　ちょっと待って、駄目って盗ったら。
私　なんで？

不良1　なんでって

更に引っ張り出そうとして

不良1　そこから出したら泥棒よ。
私　しょうがない。
不良1　その駐輪場の境から出したらもう泥棒確定よ。
私　盗ろうとしててよく言いますね。
不良1　俺はいいけど君はだめよ。
私　なんで？
不良1　自分のあるやん。
私　自分のあってもとる人は盗る。
不良1　堂々としすぎ。
私　こそこそ盗れば盗っていいの？
不良1　俺らが盗るのとなんかちょっと違う感じやん
私　盗るのに違いあるん？
不良1　ごめんねって思いながら盗ってないやん。
私　・・・ごめんね、ごめんね、この人今いるみたいだから、ごめんね。
不良1　待て待て待て待て。
私　(引っ張り出そうとして)ごめんね、もうここには帰ってっこれないけど、忘れないでね、ごめんね。

不良1　誰にごめんなの？
私　あ、私が？
不良1　え？
私　ああ、私がごめんって思うってこと？
不良1　私じゃなかったら誰が思うんよ
私　自転車。自転車が、私持っていかれてしまうけど、いなくなるけど忘れないでね、ごめんねって。
不良1　そんな気持ちなのかもしれんけどね、自転車も。
私　持ち主に言いたいはず。
不良1　自転車の気持ち言ってどうすんの。
私　ああ、物が喋らないと思ってるタイプの人間ですね。
不良1　はい？
私　じゃあ物が話しかけてきたように思えた時の話しますね。
不良1　ん？
私　聞いてください。
不良1　は？

私は自転車を駐輪場の境から出した

私　川に白い布切れみたいなものを見つけたんです。
不良1　なんの話？

私　川に生えてる水草に白い布がチョンって引っかかってて流れに合わせて揺れてます。
不良1　布が？
私　キッタナイ川だから白がすごい目立ってて、緩やかな川の流れ合わさってそれがとっても綺麗に見えて、水草から外してそのまま川の流れに流したら面白いかな、綺麗かなって思って、棒でその白い布をツンツンしてたらそれ猫でした。
不良1　・・・。
私　水草から離れてゆっくり流れ出したら頭の部分が見えてきて、ちょうど頭がこっち向いてる感じ？わかります？ああ駄目だ間に合ってない！あ。
不良1　私の方見てる感じの角度？その時、私なんて思ったと思います？
私　わかんない、
不良1　これ私の盗まれた自転車やん！小学生の頃盗まれた私のキティちゃんの自転車やん！
私　猫なのになんで自転車だって思ったん。
不良1　白いキティちゃんはこっちを見ながら言いました。あなたに乗られたかったわけじゃない。だから持ち主に乗られたいわけじゃないんです自転車も。だからいいんです、私が乗っても。人がまたがって初めて自転車でしょ？私が自転車にしてあげる。
不良1　待って。

私　あたし、どこから来たのかな？
不良1　団地の子じゃないの？
私　ずっとここにいて、もう誰にも乗られない。遠くから来たのは覚えてる。
不良1　だれ？
私　私まだ走れるよ。
不良1　え？
私　最初は良かった気がするの。ピッカピカの一年生で、イイコイイコされてたし。でも大きくなったら乗られなくなった。そしていないけどいるみたいになっちゃった。通りすがりにチラッとこっち見たりして、何か言いたげで、でも何も言わなくて。どんどん錆びてくし、タイヤもぺちゃんこになっちゃって、きっとブレーキも壊れてる。止まらない自転車は怖かったのかな。見ても乗ってもくれなくて、一人でじっとしてるとさ、これでもいいかなって、これも悪くないかなって、そしてまた次の日になって寂しくなっての繰り返し、でも私まだ走れるよ。見て！今私乗られようとしてる！嬉しい！ありがとう！乗って！私に！さあ乗って！私まだ走れるよ！
不良1　行こ、いっしょに、間に合おう！ピアノ教室！（振り返り）ね。
私　ねって。
不良1　聞こえた？
私　何が。
不良1　声
小芝居は見た。

私　この鍵のついた自転車もどこからか盗ってこられた自転車でしょうね。
不良1　違うと思う
私　駄目だ間に合わない！もう行く！（またがって）
不良1　待ってって、泥棒なるからそれ！
私　乗って！
不良1　おれ？
私　いいから乗って！
不良1　・・・。
私　乗って！
不良1　はい！

不良は自転車の後ろにまたがる

不良1　乗った
私　行くよ！
不良1　う、うん。
私　まだ誰かのためにだって走れるんだ私！
不良1　何これ。
私　私は私やもん、誰のもんでもないんちゃけ！ああ、風が気持いい
不良1　進んでないけど

私　聞こえる？声よ、あっちからこっちから、盗まれた者たちの小さな声が。
寂しい声、悲しい声、自分攻める声、誰かに言いたくても言えない声、一
人ぼっちは可愛そうだよ、だったら最初から手に入れないで、乗らなくて
もいい、磨いてくれなくてもいいから、ちゃんと見ててほしかった！話
しかけて欲しかった！要するに大事にしてほしかった！でもまだ間に合う
よ、間に合うよね！？、まだ間に合うよ、ピアノ教室！
不良1　進んでないから間に合わないよ
私　間に合わなかったらピアノがピアノでなくなっちゃう
不良1　は？
私　私はいますかー！
不良1　なんだよ急に、
私　私はいますか～！
不良1　いるよ
私　どうしてわかるの
不良1　どうして？
私　どうして私がいることがわかるの？
不良1　うるせーから
私　私はいますかー！
不良1　そやって叫んでるから！
私　叫んだって見てくれないだろーが！
不良1　そんだけしっかり叫べば見てくれるんじゃねーの！？

私　私はいますかー！
不良1　だからいるって
私　いるとかいないとかそゆことじゃないんよこの問題は
不良1　わかっとるけど難しんよ！
私　私！私です！それだけ！
不良1　うるさいよ！こっち見んなや。もうゴジラだな。うるさくて胸が痛いよ、
小さな小さなゴジラだよお前は
私　怪獣。
不良1　おらんよ、でも知っとるよ。

私は大きく息を吸って

私　知ってて。がおーー！！！
不良1　もう十分、降りて
私　やだ。
不良1　降りろ。
私　はい。
不良1　直せ。
私　はい。

私は自転車をもとに戻す。不良2が帰ってくる

不良2　なんか今叫んでなかった？
不良1　別に
不良2　ほらこれで間に合うよ、いいよ乗って行って、戻って来たら裏のチャリ置き場に止めといてね鍵はつけたまんまでいいよ
私　ありがとうございます。

私は不良2が持ってきて自転車にまたがり

私　（不良1に）聞こえる？

私は自転車に乗って去る

不良1　あれ誰の？
不良2　知らん。
不良1　サビだらけやん。
不良2　いいんよ乗れたら。
不良1　・・・自転車ってさ、乗られて初めて自転車やんな。
不良2　なんいいよんお前。
不良1　なんもない。
不良2　ちょっと俺ドライバー持ってくるわ。

不良1　ああ、うんうん。

不良2去る

不良1は私の自転車にまたがって

不良1　ガウ～。

憧憬

作　山口大器

【登場人物】
サチ
カズコ
マリナ
少女

北九州市のとある田舎にある家。その一室。
3月上旬のある日である。
その部屋には大きな人間大の箱が横たえてある。
それは、棺である。
葬式を出すにあたり、サチとカズコは遺品整理をしているのであった。
すぐ近くにマリナもいる。

マリナ　（スマホで制服のほつれた部分を写真に撮り）ここもや。
カズコ　ちゃんと綺麗に着んけんよ。行儀良くせんけん。

マリナ　いや、行儀よかった方やけん。まじで。でも3年も着たらボロになるやろ。また着るとか思っとらんし。
カズコ　いいやんね、制服で。高校生なんやけ。
マリナ　もう卒業したんですー。春から女子大生になるんよ。それでスーツも買ったんよ。でもこっち着ろって。
カズコ　いいやん、かわいいよ制服。
マリナ　いや、卒業してまで制服とかありえんけん。
サチ　制服でいいやんね。
マリナ　恥ずかしいって。
サチ　マリナちゃん、（足下を指して）へリ。踏んどるよ。
マリナ　あ。（足を動かす）
サチ　大きいおばあちゃんが化けて出るよ。
カズコ　おばあちゃん、うるさかったもんねぇ。
マリナ　めんどくさ。
カズコ　そんなこと言わんの。ほら、お母さんの方手伝っておいで。
マリナ　向こうじいちゃんが飲み出したけ逃げてきたん。
サチ　もう飲んどるとね。
カズコ　お寺さんこれからでしょう。
マリナ　大丈夫やろっち。
カズコ　こっちの気もしらんで。これ終わらんよ。
サチ　なんでも取っとったけんね。

カズコ　こんなん見ると、自分はもう定期的に整理せなって気になるね。
マリナ　自分が死んだ時整理してくれる人おらんけね。
カズコ　余計なお世話です。
マリナ　いい人おらんの？
カズコ　おらんおらん。
マリナ　悲しいー。こんな美人なおばさんなんに。
カズコ　おばさんは余計。私は待っとるんよ。運命をね。
サチ　運命なんて待っとってもこんのよ。
マリナ　おばあちゃんに笑われとるよ。
カズコ　お母さんに言われたくないです。
マリナ　おじいちゃんまた言いよったよ。
サチ　なんて。
マリナ　おれは7人の男をフリ続けた女を落とした幸せもんやぞ、って。
サチ　また……。
カズコ　酔っぱらうとすぐその話する。
マリナ　おばあちゃん、じいちゃんのどこがよかったんかね？
サチ　どこやろかね。
カズコ　ずっと教えてくれん。
マリナ　え、秘密なん？
サチ　（隠している風に）秘密よ、恥ずかしいけ。
カズコ　さ、はよこれ、進めな終わらんよ。写真もいるもんいらんもん分けな。

マリナ　（写真を一枚手に取り）これなんなん。
カズコ　これ？これお母さんやないん。
サチ　ああ、これ、若戸博のやん。
マリナ　この女の子、おばあちゃん？
サチ　そうよ、これ、ばあちゃん。
カズコ　これ何年前。
サチ　何年前やろ、14歳とかやなかったかね。
カズコ　60年くらい？
マリナ　ふる！（持っていたスマホで写真を撮る）。
カズコ　写真を写真とってどうするん。
マリナ　なんとなく。
カズコ　かわいい女の子やねぇ。
マリナ　モテたんやない？
カズコ　ほら、7人の男をフった女やから。
マリナ　あ、そっか。
サチ　茶化さんのって。

3人は棚の捜索を進める。

カズコ　これは？わ、母子手帳や。すご。
マリナ　え、誰の？

カズコ　これ、お母さんの生まれたときのやない。
サチ　こんなん、ようとっとったね。
マリナ　これは？靴下？

マリナは足袋を取り出す。

サチ　それ、足袋や。
カズコ　なんで、足袋がこんなとこ。
サチ　私のや。昔日本舞踊習わせられとって。
マリナ　わ、これ、箸？

マリナが手にしているのは、小さい子供用の箸。

カズコ　なん、この箸。
サチ　昔、使っとった、箸や。
マリナ　なんで、こんなん、取っとるん。
サチ　わからん。
カズコ　箸って。お母さん昔使った箸とかよう覚えとったね。
サチ　これで、右利きに矯正されたんよ。嫌いやったー、この箸。
マリナ　え、じゃあ、この写真は？

次に取り出したのは、古びた写真であった。

マリナ　うわ、男の人の写真や。まあまあカッコいいやん。
カズコ　これも、お母さんのかね。
サチ　これ……。

心当たりがある様子でサチは写真を眺めている。

マリナ　この奥は？何が入っとるん。
カズコ　ちょっと、マリナちゃん、順番に。

と、「ヒッ……」という細い叫びと共に、棚を探していたマリナの手が急に止まる。

マリナ　ちょっと、ヤバイもん、見つけた。
カズコ　なん、ヤバイもんって。
マリナ　これ……。

と、棚の中を指差す。
カズコもそこにあるそれを確認し、

カズコ　お母さん。これ。

と、マリナとカズコが運び出したのは、一人の少女であった。
少女は死んだように動かない。

サチ　……。

しばしの沈黙が流れ、

カズコ　人間？
マリナ　かわいい女の子……。
カズコ　マリナちゃん、そっち。

と、カズコとマリナは少女を床に寝かせる。

マリナ　死んでるみたい。
カズコ　縁起でもないことを。
マリナ　これ、どこの子？
カズコ　さあ……
サチ　……。
マリナ　警察かな。

カズコ　え、警察？なんて？
マリナ　だって。知らない女の子を拾いました、とか。
カズコ　ここに、ずっといた、ってこと？

マリナとカズコはそっと棺に目をやり、そして少女に戻す。
ふと、マリナは持っているスマホで少女を写真にとり、

カズコ　マリナちゃん、
マリナ　ごめんなさい。
サチ　（少女に）サッちゃん。
カズコ　？？
サチ　サッちゃん。

と、ゆっくり、少女は目を開き、ポツリと語り出す。

少女　お母さんなんか、嫌いや。
サチ　そんなこと言わんといて。
少女　私の自由やん。なんの権利があるん。
サチ　お母さんにはお母さんの考えがあるんよ。
少女　考えってなん？紀之くんの写真無理やり取り上げて。見送りにも行くなって私の自由やん、そんなん。

マリナ　紀之くんって、誰？
カズコ　さあ。
マリナ　（男の子の写真を取り上げて）もしかして、この男の子？
カズコ　えぇ？

少女、立ち上がって、

少女　なんの権利があって、私の自由を奪うん。いいやん、別に。女の子が男の子の写真持っとっても。
サチ　そんなに、好きやったんね。
少女　好きやった。見送りに行くって、約束したっちゃん。そしたら、紀之くん嬉しそうにしとった。嬉しそうに笑っとった。
サチ　ニカって、いつもみたいに白い歯を見せて。
少女　そう。全部、お母さんのせいやん。いいやん、お別れくらいさせてくれても。

マリナ　あ、じゃあ、もしかして。
カズコ　何？
マリナ　さっきの、さっきの写真。（と、若戸博の写真を見せて）
カズコ　若戸博の。
マリナ　これ。（写真と少女を見比べて）おばあちゃん。

カズコ　え。嘘。

少女　なんで、行っちゃいけんの。
サチ　なんでもよ。
少女　行きたかったんに。最後に、会いたかったのに。
サチ　うん。
少女　東京、行くんよ、もう、会えんのよ。
サチ　そうよ。
少女　でも、行くなって言うん。
サチ　そうよ。
少女　なんでなん。
サチ　……。
少女　なんでなん。
サチ　なんで、いけんかったん。
少女　私が聞いとるんよ。

と、サチは近くに横たえてある棺のそばに行き、

サチ　許せんかったんよね。キチンと、お行儀よく育ててきた娘が、男の子の写真なんか持っとることが。許せんくて、それを言わずにはおれんやったんよ。お母さんは。

少女　なんそれ。
サチ　そうなんよ。きっと。お母さんは、私を思い通りにしたかったんよ。
少女　そんなん、いやや。
サチ　それでも、私は、見送りには行けんかった。
少女　……。
サチ　行けんかったんよね。逆らうことが、怖かったんよね。

マリナ　あの……。
少女　なに。
マリナ　おばあちゃん、ですか。
少女　？
マリナ　あ、孫です。この写真、あなたですよね。（写真を見せ）
少女　……。
マリナ　それで、このカズコおばちゃんが、あなたの、二番目の娘で、あ、私は長女の娘なんですけど、それで、

少女　可愛くない。
マリナ　え。
少女　変な髪型。スカートは短いし。もっとお上品になりなさいよ。
マリナ　おばあちゃん？
少女　あんたが、いい歳になっても結婚しない娘ね。運命？は。馬鹿みたい。いい、私なんかね、お見合いで結婚させられたの。いい歳になったら結婚す

る、それが当たり前なんよ。

カズコ　ごめんなさい。

サチ　そんなこと言わんでいいと。サッちゃん。

マリナ　お見合い？

少女　そうよ。お見合い。お父さんが写真を持ってきたってだけの人と、有無を言わさず結婚したの。そしてそれを受け入れたの。

マリナ　え、だって、7人の男をフリ続けたって、

少女　はっ、言っとくけど、全員お見合いで紹介された男だからね。くる男くる男、全然パッとしないからって、断り続けてたらそんなことになっちゃってただけ。そしたら、お母さんが次はないぞって。そんなこと言われたら結婚するしかないじゃない。

サチ　別に、おじいちゃんのこと、嫌いじゃないのよ。

少女　甘えてんのよ。時代に。いい人がいないからって。いい、結婚して子供を産んで、家庭を持って、それが幸せなのよ。

カズコ　お母さんにそんなことで叱られるとは、思ってなかったわ。

サチ　そんなこと、思っとらんよ。

カズコ　ごめんね、親不孝もんで。

少女　憧れなんて、するだけ無駄なんよ。それを私は、その人から学びました。

サチ　そんな、当てつけみたいにするのはやめて。

少女　当てつけって、全部あなたが思ってることでしょう。

サチ　思ってない。

少女　本当に？少しも？自分の母親にされたのと同じだけ、娘たちを縛り付けたいって、そうするべきだって、本当に少しも思ってない？

サチ　思ってない。むしろそうならないように、心がけてるの。

少女　心がけてるってことは、少しは思ってるってことじゃない。思ってるけど、頑張って口に出さないで、いいお母さんいいおばあちゃんを演じてるってことじゃない。

カズコ　そうだったの。

サチ　そんなことない、そんなことないの。

少女　そうなの。私は分かるの。小さい頃からあれしろ、これしろ、あれすんなこれすんな。お行儀よくしろ、右手を使え、舞踊をならえ、うわつくな。そうやってあなたにかけられた呪いは、少しずつ娘にも注がれてるの。どれだけ上手く誤魔化したって、気がついたら彼女たちを呪ってるのよ。

サチ　どうしろっていうの。

少女　どうしようもないでしょう。認めなさいよ。あなたが奪われてきた憧れは、こうやってこの箪笥の中で息を潜めてあなたを見つめてるの。あのとき、無理やりにでもお見送りに行ってたら、もしかしたらまた別の人に恋できたかもしれない。

サチ　でも、私は行けなかった。言いつけを破ることが怖かったの。

少女　そう、そして、あなたは恋を奪われ、憧れをこの箪笥の中に閉じ込められたの。だから、あなたはずっと恋ができなかった。そして恋に憧れたまま、お見合いで出会った人と結婚させられたの。

サチ　そう、そうよ、そうなの。認めるわ。認めるから、もうやめて。
少女　私は、これからもずっと、呪い続けるのよ。
サチ　断ち切れないのよね。
少女　そう。仕方がないの。

と、少女は棺に向かって歩き出す。

少女　でもまあ、
サチ　うん。
少女　娘と孫に会えて良かったわ。
サチ　そうでしょ。
少女　うん。

と、少女は棺に入る。
少女はいなくなる。

マリナ　なんだか、おばあちゃんに叱られた気分。
カズコ　うん。向こう、手伝ってこなくていいの。
マリナ　うん。おじいちゃんうるさいから。
カズコ　今日くらい、いいじゃない。大好きな人のお葬式なんだから。
マリナ　まあね。じゃあ、お手伝いしてこようかな。

カズコ　よろしく。

マリナが部屋を出て行こうとする。

マリナ　おばあちゃんさ、
カズコ　うん。
マリナ　幸せだったかな。
カズコ　きっと。
マリナ　うん。

マリナは部屋を出ていく。
カズコは一人部屋に残され、
そして棺に手を触れ、

カズコ　お母さん。

棺に向かって呟くカズコ、サチが見つめている。

おわり。

還ってきた極道

作　渡辺明男

【登場人物】
勝之（死んだはずの親父）
正勝（勝之の息子）
おばあ（正勝の祖母）

夜の墓場。なぜかキャンプ用のテントが張ってある。
そこへ、おばあがビクビクしながらやって来る。

おばあ　（カラスの鳴き声が響いて）ぎゃあ！　くそっ！（テントの方を見て）・・なにもこんな墓場でキャンプせんでもよかろうに。幽霊でも出たらどうするとね、バカちんやねえ。あっ、なんか踏んだ。（確かめて）あ、犬の・・。もうっ！　うんこ！

テントの中から正勝の声が。

正勝　（声のみ）ばあちゃん？　ばあちゃん来たと？

おばあ　（足の裏を地面にこすりつけながら）正勝ぅ～。ばあちゃん疲れた～。こんなとこまで行ったり来たり・・

おばあ、テントの中をのぞき、驚く。

おばあ　あんたなんしよんね！

正勝　（尻から出てくる）さっきそこで大をしたら、尻がかぶれてから・・

おばあ　（足を地面にこすりつけて）これあんたのね！

正勝　葉っぱで拭いたらお尻が燃えるように熱いの。それで、お母さんと話はついたでしょうか？

おばあ　つくわけなかろうもん。カンカンよ。サマーキャンプもなし。

正勝　おばあちゃん、あんなに頼んだのに・・ああ、がっかりしたらお尻がますます熱く・・

おばあ　ばあちゃんが伝えても埒が明かん。帰ってきてお母さんと直接話し。

正勝　いやだ！　サマーキャンプに連れて行く。その言葉が聞けるまで絶対に帰りません！（お尻をバンバン叩く）

おばあ　正勝！　あんな馬鹿なことしたんやけ、許してもらえるわけないやろ！

正勝　ちゃんとお母さんに謝り！（正勝を無理やり連れて行こうとする）

いたいいたい放して！　僕は悪い奴をぶん殴っただけですよ！　むしろ正義のヒーローなんですよ僕は。おばあちゃん、誇りに思っていいんだよ？

おばあ　か～、情けない・・わたしはね、あんたの取り柄は優しいところやとずっと思っとった。それがこんな・・いったい誰に似たんやろかねぇ・・

勝之が墓場の暗闇から浮かび上がる。ワンカップ片手にごきげんな様子。

正勝　・・とにかく！　サマーキャンプが決定するまでは絶対に家に帰りません。さようなら！

正勝、テントに引っ込む。

おばあ　（ため息をつく）甘やかしすぎたんかねえ・・。かちゅき（勝之）が生きとったら、こうはならんかったんやろか・・

勝之　（鼻歌）♪とんすとんとん～・・母ちゃん、久しぶりやの！

おばあ　（会釈して）ええ、どうも。

おばあ、勝之の姿を見てびっくり仰天。

おばあ　か、かか、かあ、かちゅき（勝之）！??　あんたなんで生きとるとね！?

正勝、テントから顔を出す。

正勝　うるさいよ。ユーチューブが聞こえんやろ。お化けでも出たんね。
勝之　（正勝に）おお、おまえ正勝か！　面影があるわ。大きくなったの～！
正勝　（おばあに）なんねこの人。初対面で馴れ馴れしくせんでっち、伝えてくれん？
おばあ　（ふらふらしながら）これは、かちゅき（勝之）。
勝之　勝之たい。
おばあ　あんたの父ちゃんよ。
正勝　へ？

勝之、「お控えなすって」のポーズを取る。
おばあも、つられて「お控えなすって」のポーズを取る。

勝之　柳の下、墓場の仁義、おひけえなすって。手前、九州は筑前、若松にて稼業に身を費やしておりやした姓は林原、名は勝之と申します。一度はくたばった身でござんすが、わけあってこちらに化けて出ている者にございます。以後、万事万端ざっくばらんによろしくお頼み申し上げます。
おばあ　ありがとござんす。死んだはずの息子が突然現れて、またぎっくり腰にならんばかりのビックリ仰天でござんしたが、お気になさらずざっくばらんにお頼み申します。

勝之　お気遣い誠にありがとうございます。それでは、そちらから手をお上げください。
おばあ　いえ、あんさんのほうからどうぞ、手をお上げになってください。
勝之　では、二人同時にお上げなすって。
勝之&おばあ　挨拶、ありがとうございました。

勝之とおばあ、顔を上げる。

正勝　ばあちゃん、いまのなんね？
勝之　仁義を切ったんたい。
正勝　仁義？
勝之　極道のルールたい。
正勝　極道？
勝之　なんも知らんのかキサン！　高倉健の映画見てないんかこらあ～。男なら見とけ～、昭和残侠伝。昭和館とかで～。（酒を飲む）
正勝　（おばあに）極道？
おばあ　（うなずく）
正勝　（勝之を指して）僕のお父さん？
おばあ　（うなずく）
正勝　い、いや、お父さんは不動産屋の社長やったんやろ？　金持ちで家にゴルフバッグがあったって・・

おばあ　（目をそらす）
正勝　なんで目をそらすの！　嘘だったの？！
勝之　ゴルフバッグには、日本刀を入れとったんたい。襲撃に備えないかんやろうが。のう？
正勝　襲撃・・いやいや、そんな馬鹿な。ああ、わかった。二人して僕を担いでるんでしょ。あれだ。大方お母さんにでも頼まれて。ははは、騙されるもんか！　ばか！　ははは！
勝之　なんやと、こら。

勝之、正勝をにらみつける。

正勝　・・・。
勝之　そんなことより、話は聞いとったぞ正勝。お前、人を殴ったんか。

おばあ、とっさに正勝をかばう。

おばあ　ち、違うんよ、かちゅき（勝之）。この子もそんなつもりはなくて・・会社の上司とウマが合わんでから、それでちょっと揉めただけなんよ。（正勝に）ね？
正勝　（おばあの後ろに隠れながら勝之に）・・むかつく上司を殴っただけですよ。そ、それがなんなんですか。あなたには関係ないでしょ。

勝之　（ニッコリ笑って）・・やるやないかぁ。
正勝　お父さんだ。この人僕のお父さんだ！

勝之、懐からドスを取り出す。

正勝　はおぅ！（驚く）
勝之　ドスは効かせなのう。飲め、正勝。（正勝にワンカップを渡す）
正勝　はい！（酒を飲む）ぶっ、ごほ。い、いやあ、びっくりしたなあ。聞いてた話と全然違うから・・。まさかお父さんが・・
おばあ　（勝之に）あんた、父親ならちゃんと叱らんかね！
勝之　（正勝からワンカップを奪い酒を飲む）俺もまさかこうして息子と酒を飲める日が来るとは思わんかったけのう。成仏せんでよかったわあ！　どんどん飲め、正勝！　とぅりゃ！（正勝にワンカップを回す）
おばあ　もうっ！
正勝　（酒を飲む）ぷはー。でも、お父さん、ということはですよ、あなたは幽霊ってことになりますけど。あいや、生きかえったんですか？
勝之　いや、死んどる。
正勝　（あっけらかんと）じゃあ幽霊だ。（酒を飲む）
勝之　ほんで正勝、お前は堅気なんやろ。なんの仕事や。
正勝　（酒を吹き出しそうになる）ぶっ。いや、はい、いえ、その、いまは、将来に向けての準備中というか・・

おばあ　それで、お母さんと揉めとるんよ。（勝之に）あんたからも言うてやって！
勝之　ま、お前の好きなように生きたらええ。お前の人生や。
おばあ　もうっ！
正勝　いや、まっったくその通りです。（酒を飲む）・・あのねお父さん。僕、実は夢があるんです。キャンプ場の経営。僕、子供のころからお母さんにサマーキャンプに連れて行ってもらってて、それで・・
勝之　お母さんか・・。お前のお母さんは、元気か。
正勝　あ・・はい。
勝之　そうか・・。
正勝　ええ・・。あ、で、その、キャンプ。キャンプで食べていくのが僕の夢なんですが、現実は甘くなくて。仕方がないから、やりたくもない仕事を嫌々やっていたんです。それで先日、その会社の上司と喧嘩して・・ですね、いや、むこうが悪いんですよ。それで、その・・

勝之、鋭い目つきになる。

勝之　・・殴ったんか。
おばあ　（いやな顔）
正勝　（気合いの入った顔で）・・・・・はい。
勝之　（満面の笑み）やるやないかあ！
正勝　（ガッツポーズで）ボッコボコにしてやりましたよぉ！

おばあ　もうっ！
勝之　俺も、上のモンにはよう噛みついたもんよ。
正勝　ですよね！　ああ、話がわかるお父さんだなあ。（酒を飲む）
勝之　俺は、嘘をつくやつがどうしても許せんタチでの～。上のモンやろうがなんやろうが、いい加減な奴には容赦せんやった。正勝、お前も嘘だけはつくなよ。
正勝　はい・・。
勝之　嘘をつく奴は、必ず裏切る。俺が、成仏せんやったのもそれや。今みたいに杯を交わした兄弟が俺を裏切って姿をくらませやがっての。
正勝　ほほお・・。
勝之　血のつながった家族のように思っとったけん、俺はどうしても許せんでから。必死にそいつを探しまわったが、その途中で俺は死んでしもた。
おばあ　あんた、そんなことで幽霊になってしもたんね・・。情けないねえ・・。
勝之　そうよ。情けない話やが、未練がましくこの世をさまよっとった。でも、こうして酒を飲みよるとそんな事はどうでもよくなって来るの。俺もいよいよ、成仏のし時なんかもしれん。
正勝　そんな、お父さん。せっかく会えたのに。
勝之　思い残すことのないように、墓に供えとる酒をかたっぱしから飲みよったら、お前らが来てこっちもびっくりよ。
おばあ　あんた、人のお酒盗んでから！　なん考えとるんね！　わたしにも飲ませり。（酒を奪って飲む）

勝之　よっしゃ。今から健さんの映画見るか。全員酒が入ったけいけるやろ。
おばあ　おっ、ええやないね！
正勝　ここで？
勝之　夜は墓場で上映会や。はい、始まります。
正勝　（目をこすって）あれえ映画が出てきたあ・・！

舞台が暗くなり、映画が始まる。
映画「昭和残侠伝」のテーマ曲、高倉健の『昭和残侠伝』が流れる。
映画が終わり、舞台が明るくなる。
勝之、目を瞑り、感動の余韻を味わっている。
おばあ、泣きながら「お控えなすって」のポーズ。
正勝は、ヤクザになり切った顔。
全員、かなり酔っぱらっている。

おばあ　か～、健さんカッコよか～。「俺を男にしてやってくんねえ」
勝之　これが男の生き様よ。
正勝　（目が座っている）おい親父。俺は決めた。やくざになる。うっぷ。
おばあ　正勝、あんたなん言いよるんね！
正勝　北九州の男はみんなやくざになればええんや！
おばあ　情けない・・（酒を飲む）
正勝　うっへへへ。おいこら、聞いとるんか親父！

勝之　聞いてますよ。
正勝　お前、俺には無理と思うとるやろ。バカ言え！　俺はいざとなったらやる男やぞ、おぼえとけよ、親父！
勝之　なるほど。ほんなら、いまからタマ取りに行きますか。
正勝　タマ？　金玉か。なんで男になったのにタマ取らないけんのやこら。
勝之　いえ、あなたの上司のタマを取りに行くぞって話ですよ。
正勝　・・ん、あ、え？　な、なんやと？
勝之　お前、極道になるんやろ。極道になめた態度を取ったけじめはきっちり取らせんとの。それが筋や。
正勝　あ、いや、もうけじめは取ったやろ。ボッコボコにしたんですから。大丈夫です！
勝之　それじゃあ足りん。命は取らんにしても、指くらいは詰めさせろ。それが極道や。・・そうやろう。
おばあ　あんたいいかげんに・・
正勝　いや、あ、
勝之　そうやろうが！
正勝　そうや！
勝之　よっしゃ！
正勝　行くぞ親父。
勝之　兄貴、お供しやす。
おばあ　ちょっと、あんたたち、やめんね！

正勝と勝之。二人並んで殴り込みに向かう。高倉健の歌が流れる。

おばあ　（打ちひしがれる）ああ・・やけ、やけ、かちゅき（勝之）のことは秘密にしとったのに。結局、こげなことになってしもうた・・情けない・・飲も。（酒を飲む）

と、正勝が慌てて戻ってくる。

正勝　わあぁ！　やっぱり無理ィ！

おばあ　ぶぅっ（酒を吹く）

正勝、足元がおぼつかずに思わず墓にしがみつく。そしてゲロを吐く。

正勝　おうえぇぇぇ！（腰をガクガクさせ、おもらしをする）

おばあ　あんた、人のお墓になんしよるんね！（もらいゲロ）おうえぇぇぇ！

勝之も戻ってくる。

勝之　なん逃げよるんや、正勝。上司の指を詰めに行くだけやろ。

勝之、正勝を捕まえる。

正勝　いやだあ！（勝之を力いっぱい振りほどく）

勝之、勢い余ってうんこがあった場所に倒れ込む。

おばあ　あ、そこは・・！

勝之　（背中についたウンコを嗅いで）犬のうんこが・・（正勝に）キサンこらあ・・。

勝之、ドスを取り出す。

勝之　杯交わした俺に逆らうんか。

おばあが、勝之に立ちふさがる。

おばあ　この子は、極道になれるような子やない。あんたと一緒にしなさんな！

勝之　どけばばあ。一度杯を交わしたら、言い訳は聞かん。パンツ脱げ正勝。ちんぽこ詰めろ。

正勝　また殴られる・・

勝之　・・あぁ？

正勝　あいつに会ったら、また殴られる！
おばあ　・・どういうことね。あんたが殴ったんやないんね？
正勝　・・・（首を振る）。本当はあいつに殴られた・・仕事でヘマして・・。それで・・
おばあ　会社辞めたんね。
正勝　（うなずく）
おばあ　（ほっとして）なあ～んね。そうやったんね。なんで早よ言わんやったんね。おかしいと思ったんよ。あんたみたいな気の小さい子が・・
正勝　（勝之に）お父さん、俺・・嘘をついたわけじゃなくて、その・・
勝之　ふん。（鼻で笑う）

勝之、ワンカップを拾い上げ、飲み干す。

勝之　・・お前、俺が怒ると思ったんか。バカ言え。お前のはしょうもない見栄を張っただけや。そうやろうが。
正勝　・・・（うつむく）
勝之　俺が許せんのは、男同士の約束に対しての嘘や。お前は男やない。ただの・・あのー・・あれや。
おばあ　あれっちなんね。
勝之　あれよ、あれあれ、でき・・

おばあ　出来損ないね。
勝之　出来損ないや。
おばあ　あんた、自分の子になんちゅうこと言うんね！
勝之　（正勝に）お前、本当に俺の子なんか、こら。ははは。（酒を飲む）

正勝、顔を上げる。

正勝　・・あんたに・・あんたに何がわかる。
勝之　なんや。口答えする度胸はあるんか、赤ん坊。
正勝　・・極道になって、好き勝手生きて。家族を放ってくたばって。あんたのほうがよっぽど出来損ないじゃないか！
おばあ　あ～、言われてみればそうやねえ。（勝之に）あんた、本当にわたしの子ね？
正勝　ばあちゃんは黙っとって！
おばあ　ごめん。（お口チャック）
正勝　俺を育ててくれたのは、お母さんや。親父がいなくて寂しいなんて一度も思ったことない。子供のころから、キャンプに連れて行ってくれて。車を運転して、助手席には僕が乗って。・・あんたはそこにおらんかったやないか。あんたはそこにおらんかったんや！　お父さんの思い出なんて一個もない！　ほしくもない！　さっさと成仏せえ！

正勝、勝之を殴ろうとするが、拳が止まる。

正勝　う、ぐぅ・・（膝から崩れ落ちそうになる）
おばあ　ほら、がんばらんね！　かちゅき（勝之）を殴り！
正勝　ふ、うぅ・・。（歯を食いしばって殴ろうとする）
おばあ　（勝之の肩を叩き）ほら、あんたも応援せんね！
勝之　ちっ。（自分の頬を指し）ほら、ここや。慌てんでええ。ゆっくり来い。もうちょっと顔を前に出そうか？　トゥン（顔を前に出す）。
正勝　（拳を握りしめ）ぐぅ・・くっ。
おばあ　あとちょっとよ。がんばって殴ったら、お父さんがご褒美にチューしてくれるっち。（勝之をせっつく）ほら！
勝之　（チューの顔になる）
正勝　くっ・・・・・（拳を下ろす）だめだぁ、俺にはできん！

正勝、男泣き。

正勝　お父さん、こんな息子でごめん。俺は、弱虫や・・・。
おばあ　正勝・・。

勝之、腕を広げる。

正勝　え・・・
勝之　来い。
正勝　お父さん！（勝之に抱き着こうとする）
勝之　おうりゃあ！

勝之、正勝を思いっきり引っぱたく。

正勝　あいってえ！

正勝、例のうんこの上にぶっ倒れる。

勝之　・・どうや。お前の上司より、お父さんの方が強かろうが。
おばあ　うんこ！（正勝に駆け寄ろうとする）
勝之　ほっとけ！

正勝、よろよろと立ち上がり、ふらつきながら逃げ込むようにテントへ。

勝之　・・あいつは、俺を恨んどるんか。
おばあ　そんなわけあるかね。あの子は優しい子よ。あんたに似て。
勝之　・・たしかに俺によう似とるわ。

勝之、テントの方へ向かって叫ぶ。

勝之　正勝！　健さんの映画、忘れんなよ。

おばあも、思わずテントの方を見る。
テントからは何の反応もない。
おばあが再び勝之のほうを振り返ると、そこにはもう誰もいない。

おばあ　かちゅき（勝之）！　・・消えてしもうた。

テントから正勝が慌てて顔を出す。

おばあ　・・これがあんたのお父さんよ。

正勝、叩かれた頬を押さえる。

正勝　・・・。

正勝、しばらく頬を押さえたまま何かを思い、そして立ち上がる。

正勝　ばあちゃん、腹くくった。家へ帰る。俺を、男にしてやってくんねえ。

おばあ　（笑顔になる）・・兄貴、お供しやす！

その会話を背中で聞いていた勝之、ゆっくりとあの世へと旅立つ。

おわり

【令和2年度　公演情報】

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

「Re:北九州の記憶」～番外編～

日程：令和3年2月20日（土）14時／18時・21日（日）14時　　会場：北九州芸術劇場　小劇場

［構成・演出］　内藤裕敬（南河内万歳一座）

［作］　穴迫信一（ブルーエゴナク）、鵜飼秋子（さかな公団）、坂井彩（じあまり。）、寺田剛史（block）、山口大器（劇団言魂）、渡辺明男（バカボンド座）

［出演］　文目卓弥（飛ぶ劇場）、有門正太郎（有門正太郎プレゼンツ）、飯野智子（バカボンド座）、内田ゆみ（さかな公団）、内山ナオミ（さかな公団・飛ぶ劇場）、河﨑日向子、木下海聖（有門正太郎プレゼンツ）、黒澤紋子、セクシーなかむら、高山実花、寺田剛史（飛ぶ劇場）、森川松洋（バカボンド座）、門司智美（有門正太郎プレゼンツ）

［スタッフ］

照明：礒部友紀子＊　音響：横田奈王子＊　衣裳：内山ナオミ（工房MOMO）
演出部：瓦田樹雪＊、三宅雪　照明操作：遠藤浩司＊　音響操作：柳川千尋＊
舞台監督：谷川哲朗＊　演出助手：渡辺明男（バカボンド座）
宣伝美術：トミタユキコ（ecADHOC）　広報：金子美紀＊　票券：木庭美穂＊
制作：吉松寛子＊、藤本瑞樹（合同会社 kitaya505）　プロデューサー：龍亜希＊
（＊＝北九州芸術劇場スタッフ）

主催：（公財）北九州市芸術文化振興財団　共催：北九州市　後援：北九州市教育委員会
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）―独立行政法人日本芸術文化振興会
企画・製作：北九州芸術劇場

【戯曲使用に関するお願い】
戯曲を上演する場合は、必ず左記までご連絡ください。
北九州芸術劇場 劇場事業課舞台事業係「Re:北九州の記憶」担当ＴＥＬ０９３―５６２―２６２０